

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

バンダアチェ市の復旧・復興プロセス：
バンダアチェ市における復興段階への移行と住宅供給プロセス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 直彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001391

Ⅱ. バンダアチェ市における復興段階への移行と住宅供給プロセス

山本 直彦

滋賀県立大学 環境科学部

それでは、続いて発表させていただきます。滋賀県立大学の山本と申します。よろしくお願ひします。牧さんの発表に引き続きまして、僕の場合は、住宅の供給プロセスがどういふふうに行われているかということをお話したいと思ひます。次の3つの話題の順番でしゃべろうと思ひます。1番目は主に国連機関の話です。2番目は、幾つかフィールドを見て回った中で住宅が比較的多く建っているところの話になります。先ほど山本博之先生に、少しご紹介いただきましたけれども、その村のお話です。それから3番目は、その村の住宅建設状況が基準というわけではないのですけれども、ほかのところと比較して見た場合に、全体の住宅の建設状況に対してどういふ見方ができるかという話で終わればと思ひます。

1 住宅供給のコーディネート

2005年4月までは国連機関としてはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が入っておりまして、それが4月以降になると、UNDP（国連開発計画）とUN-HABITAT（国連人間居住計画）に交替しました。この時点で、国連機関側の認識としては、応急段階が終わって復興段階に入ったということです。

UN-HABITATは供給している住宅をすべて「恒久住宅」としてはいますが、普通インドネシアで、「パーマナント」、「セミパーマナント」、「テンポラリー」と呼ばれる住宅が混在しています。インドネシアでは、これは植民地時代からそうなのですから、レンガの住宅や、コンクリートの住宅はパーマナント、木造だとテンポラリーと言われます。腰壁までコンクリートだとセミパーマナントという言い方をされています。UN-HABITATの定義と違って、ややこしくて申しわけありませんが、こういう書き方をしています。

このスライドには、構造的にはテンポラリーのものも混ざっていますが、HABITATの言い方では、仮設住宅ではなくて恒久住宅になります。NGOによって恒久住宅のいろいろなパターンがあります。



写真 1-1



写真 1-2



写真 1-3



写真 1-4



写真 1-5



写真 1-6



写真 1-7



写真 1-8

様々な恒久住宅のタイプ

UN-HABITATの役割としては、①計画段階と②実施段階という2つの段階があります。まず計画段階というのは役所間の調整をするということです。UN-HABITATに聞いた話の中で印象に残ったのは、最初、NGOが住宅を建てたくても住宅建設許可をどこでとったらいいかというのはみんな全然わからなかった。そのときに、日本でいえば区長（camat）に



写真2 Monday Meetingの様子

許可をとればいいという合意をインドネシア側の役所と間で取りつけたということでした。次の実施段階では、実際のフィールドでNGOのコーディネーションや、現場でのテクニカルサポート、最終的には住宅供給を行うという仕事をしています。

写真2はMonday Meetingの写真です。UN-HABITATが復興段階で自分たちが入ってきたとき最初に決めたのは、インドネシアのバンダアチュエの地方政府が話に全く関係していなかったのが問題だから、その次の週から、公共事業省のオフィスでNGOと国連機関と地方政府が打ち合わせするということだそうです。

住宅を建設する際は、36平米で3,000ドル前後というのが一つの基準です（図1、図2、図3）。これは、インドネシアのスラバヤ工科大学に大臣クラスの先生がいらっしやるのですが、その人が決めたという話を現場で聞きました。

これは先ほども少し見せましたが、UN-HABITATが建てている住宅のタイプです。

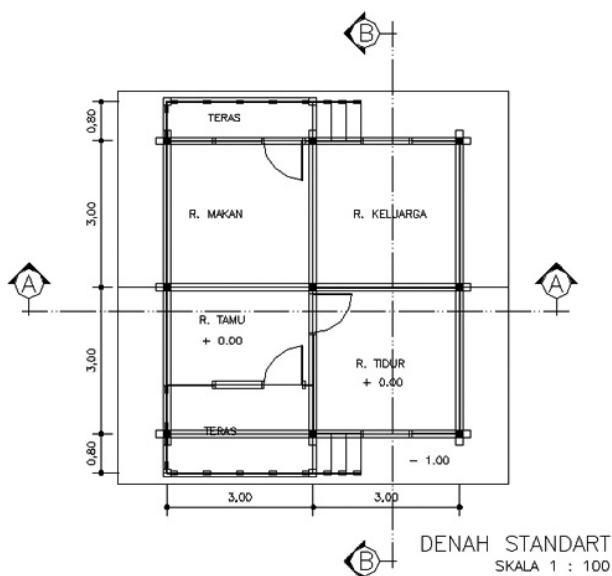


図1 床面積36㎡の恒久住宅モデルの平面図

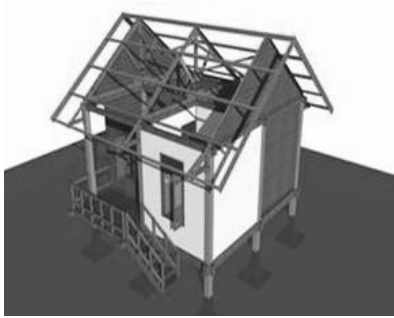


図2 床面積36㎡の恒久住宅モデルの架構図

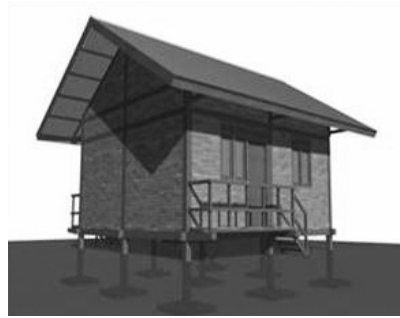


図3 床平米36㎡恒久住宅の外観図



写真3-1



写真3-2



写真3-3

UN-HABITATの恒久住宅モデル3タイプ



写真4 UN-HABITATの援助国日本

形が3つほどあります(写真3-1, 3-2, 3-3)。

昨夏の段階では現場に最初のモデルハウスとして展示されていました。最終的には、モデルハウスとしての役目が終わったら、その町内の公共施設のようなものとして使ってくださいということを住民にお願いして建物を寄付しているという話でした。

ちなみに、このUN-HABITATのモデルハウスの写真を見ると、下側のステッカーの一番下に、国連やインドネシア国旗のマークとならんで、日本の国旗がついているのが、分かります。HABITATの活動資金は、ほとんど日本から出ているそうです(写真4)。でも、実際にHABITATの現場オフィスで指揮を執っていたエキスパート2人は、

アフガニスタンから来ていました。あとはインドネシア人のスタッフが数名働いていました。

2 復興・住宅供給の事例

ここから2番目の話です。幾つかフィールドを見て回ると、住宅がたくさん建っているところがありました。そこを例として、どういうふうな手順を踏んで住宅が建っていったかという様子を少し紹介したいと思います。バンダアチェ市内のやや郊外にある海岸沿いのデア・グルンパンと呼ばれる地区です。

この場所は航空写真を見てわかりますように、上が津波前で、下の津波後は、ほとんど家がなくなっています（写真5）。



写真5 津波前後のデア・グルンパン付近

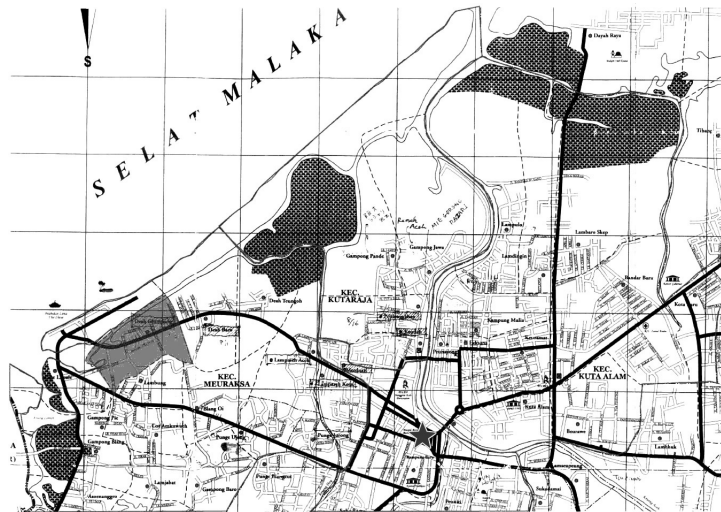


図4 デア・グレンパンの位置

市全体の地図（図4）ですと、青く塗ってある海岸沿いの場所になります。

ちょうど、バンダアチェ市の西端で隣の県の境あたりです。バイトゥラフマンという有名なモスクが市の中心にあります。これは地図では星印の位置です。市街地の中心はこのモスクのあたりです。

ガンボンと言うのは基本的には都市部の区の下の行政単位にあたります。日本でいえば「町（ちょう）」ぐらいの感じです。デア・グレンパンでは徹底的に住民主導でいろんなことを決めて、日本でいうほぼまちづくりに近いような感じの勢いで、自分たちの居住地を復興しようとしていました。

住民による復興の中心的な役割を担っていた組織にKERAP (KOMITE REHABILITASI PERMUKIMAN) というのがありました。日本語になおすと「居住地復興委員会」という意味で、それが住民の中で組織されて主導権を握って、いろいろ事業を動かしていくわけです。2005年4月に結成されています（図5）。

図5は、実は、KERAPがつくった1年間の「短期復興プログラム」の報告書の1ページからとってきたものです。KERAPの中には、住宅（PERUMAHAN）と居住地（PERMUKIMAN）をそれぞれ担当する二つのグループがあることがわかります。

報告書は6月につくられています。4月に組織され、3カ月足らずの間に本当にたくさんのお仕事をしています。短期復興プログラムでは、2005年6月から1年間のガンボン（村）の復興計画を立てています。

津波後の現状調査は、もちろん住民が行っていました。基本的には住民有志のボランティアです。表1に調査を行ったボランティアの人達の名前が挙がっていますが、みんな若くて、30歳前後の人たちですね。全員で8人ですが、まず住民の現状の把握を

KOMITE REHABILITASI PERMUKIMAN

K E R A P

DEAH GLUMPANG MEURAXA

Koordinator : Herman Hasbalah J.
 Anggota : Ria Hanum, Teuku Salihin, Multaza, Bahrul Aziz, Marzuki,
 Amri, Zainuddin JB, Hemilda

KELOMPOK KERJA (P O K J A)

RUSMAIZAR
Ketua

PERUMAHAN
RAHMAT MUNA
JASRIANDI

PERMUKIMAN
ZUKIA
ZULFIZAL

図5 居住地復興委員会の構成

表1 居住地復興委員会のメンバーのプロフィール

No	名 前	プロフィール				
		住所	性別	年齢	職業	学歴
1	ZAINUDIN JB.	DSN MAKMUR	男	34	会社員	高卒
2	DARWIS ST.	DSN SEJAHTERA	男	26	会社員	大学卒(学部)
3	ZAID AZRULLAH	DSN DAMAI	男	30	商売	高卒
4	JASRIANDI	DSN DAMAI	男	29	会社員	高卒
5	MULTAZA	DSN BAHAGIA	男	30	会社員	大学卒(学部)
6	RIA HANUM	DSN MAKMUR	女	33	IRT	高卒
7	ISKANDAR FAUZI	DSN BAHAGIA	男	20	ボランティア	高卒
8	HERMAN H.	DSN SEJAHTERA	男	33	会社員	大学卒

表2 デア・グルンパンの津波前後の人口比較

住区名 (丁目)	津波前					現 在				
	世帯数	総人口	成人	子供	低所得 世帯数	世帯数	総人口	成人	子供	低所得 世帯数
Damai	129	349	284	65	4	62	101	86	15	36
Makmur	152	384	307	77	2	49	84	78	6	21
Sejahtera	120	331	296	35	6	51	90	79	11	40
Bahagia	137	362	302	60	8	31	77	83	—	41
合計	538	1426	1189	237	20	193	352	326	26	138

して、その次に復興対策を立てています。

住民の現状の把握ですけれども、左側の数字が津波の前、右側の数字が去年の6月現在です(表2)。全人口が、1,426人から350人に減っています。その次に大人の人数が出ていて、これを全人口から引き算してやると子どもの人数が出てきます。先ほどの

表3 デア・グルンバン住民の避難先

住区名 (丁目)	居住者の現在居住地 (世帯数)				
	従前住居に戻った世帯	避難用バラック	親類の住居	市外	不明
Damai	7	—	49	6	—
Makmur	8	—	37	4	—
Sejahtera	6	—	41	4	—
Bahagia	11	—	11	9	—
合計	32	—	138	23	—

表4 デア・グルンバンのインフラ被害状況

No	居住地のインフラ	場所	規模	現在の状態			予定
				消滅	重度被災	軽度被災	
1	海水の堤防	DSN DAMAI	1000m		○		再建予定
		DSN BAHAGIA					
2	水門	DSN MAKMUR	2 ユニット		○		再建予定
3	ガンボンの車道	ガンボン全体	1900㎡		○		再建予定
4	歩道/路地	同上	2500㎡		○		再建予定
5	側溝/排水路	同上	3000㎡		○		再建予定
6	礼拝所	DSN DAMAI	12×23m	○			再建予定
7	集会施設	DSN DAMAI	8×6m	○			未建設
8	バレーボールコート	DSN BAHAGIA	10×16m		○		再建予定
9	小学校、幼稚園	DSN DAMAI	15×12m	○			未建設
10	貯水池	ガンボン全体	±43区画	○			未建設
11	養魚池	DSN MAKMUR	100×90m		○		未建設
12	通過道路 (幹線)	RAMA SETIA 通り	200m		○		未建設
		DSN MAKMUR					
13	通過道路 (幹線)	PINTU AIR 通り	180m		○		未建設
14	住宅、店舗	ガンボン全体	±500戸	○			再建予定

牧さんの説明にもありましたが、計算すると子どもは、ほぼ10人に1人しか生き残っていない、大人だと、4人に1人が生き残っている、そういった状態になっています。とにかく全体の人口は、4分の1、5分の1、あるいは場所によっては6分の1、7分の1というように、本当にたくさんの住民の方が犠牲になっています。

調査が行われた去年の6月には、生き残った住民も、まだ、あまりもとの居住地に戻っていませんでした。表の左から2列目の数字が、ガンボンに戻っている人の人数です。灰色でマークしている列の数字が、親類などの家に身を寄せて戻っていない人たちの人数です

表4は、自分たちの町内の被害状況の把握結果です。縦の項目に住宅などいろいろなインフラストラクチャーが挙げてありまして、横の項目はそれがどうなったかという状況です。Hilangと書いてあるのは全く無くなってしまった、次がかなり重く壊れた、その次軽く壊れたという分類です。縦の項目の一番下が住宅と店舗でして、500戸程度あったものが、ほぼすべてなくなったという状況になっています

その次には、住民の状態の記録を集めています (表5)。一覧にされた表を見てみると生き残っている人たちの津波前の土地所有状況、土地が津波によって沈んだかどうか

表5 デア・グルンパン住民の土地・住宅の被害状況

	女	22	未婚	子	大学生		○										
4	男	45	既婚	父	会社員	○				○	○					○	
	男	—	既婚	子	学生		○										
	男	12	未婚	子	小学生		○										
5	男	58	既婚	父	会社員	○				○	○					○	
	男	23	未婚	子	警察官		○										
	男	15	未婚	子	中学生		○										
6	男	25	未婚	子	会社員		○			○						○	
	男	22	未婚	子	会社員		○			○						○	
	男	15	未婚	子	中学生		○			○						○	
7	男	35	既婚	父	会社員	○				○						○	
	女	7	未婚	子	小学生		○			○							
	女	5	未婚	子	幼稚園		○										
8	男	38	既婚	父	HONOR	○				○						○	
	女	13	未婚	子	中学生		○			○		○					
9	男	35	未婚	父	会社員	○				○	○						
10	男	42	既婚	父	自営	○				○	○						
	女	26	既婚	子	会社員		○			○	○						
	女	22	未婚	子	大学生		○			○	○						
11	男	40	既婚	父	自営	○									○	○	
12	男	40	既婚	父	会社員		○		○				○			○	
13	女	24	未婚	子	中退		○			○	○						
14	男	32	未婚	子	会社員		○			○	○					○	
	女	28	未婚	子	中退		○			○	○					○	
15	男	42	既婚	父	年金	○				○	○					○	
	女	—	—	妻	主婦	○											
	男	—	—	子	—	○											
16	男	27	未婚	子	大学中退		○			○	○					○	
17	女	37	既婚	母	主婦	○				○	○						
	男	50	既婚	父	警察官	○											
	男	2	未婚	子	—		○										

か、それから、家の構造が津波前にコンクリートの家だったか、それとも半分木材の混ざった半木造だったのか、完全な木造だったのか。現在はそれが残っているのか、たくさん壊れているか、あるいは少し壊れているのかという内容です。

表6は、現状把握の後にインフラあるいは住宅の問題をリストアップしているものです。この時点では、挙げられた項目は順不同でどこにどういった問題があって、そこではどういう必要があるかということが書いてあります。これが40から50ぐらいリストアップされています。

その問題をそれではどれから順番に解決していくのかということ、点数表をつけて決めているんですね(表7)。これも住民のうち短期計画をつくっているメンバーが中心になって決めていることです。四つ指標がありまして、若干かぶっている指標内容のものもあるかと思いますが、それぞれについて4点満点です。合計16点が一番多くなるわけです。点数が一番高いものが一番の必要性があるということですが、この場合は「住宅」になります。

表8は点数表の続きですけれども、同じように4×4で16点満点です。2番目に高

表6 デア・グルンパンの各被害の対処策一覧

No	住民調査結果による必要項目	場 所	発見された問題	その原因
1	歩道（路地）	ガンボン全体	住宅建設は開始されたが、歩道は未整備	津波の衝撃
2	海水の堤防	DSN DAMAI, DSN BAHAGIA	満潮時の浸水が懸念される	津波の衝撃
3	共同施設の道具と家具	礼拝所, 役所, 集会所など	今のところ、数が非常に不足	津波の衝撃
4	礼拝施設	DSN BAHAGIA	十分な礼拝所がまだ無し	津波の衝撃
5	通過道路（避難道路）	DSN MAKMUR	津波時に逃げられる方向に道が必要	津波の衝撃
6	排水溝	同上	排水が滞る場所が数カ所あり	津波の衝撃
7	応急ゴミ捨て場	同上	ゴミの捨てられ方に秩序がない	津波の衝撃
8	上水（井戸, 配管, 水溜）	DSN SEJAHTERA	いくつか海水の混じる井戸があり	津波の衝撃
9	バレーボールコート	DSN BAHAGIA	リクリエーションの組織がない	津波の衝撃
10	水門	ガンボン全体	貯水池が溢れ, 土地が水没している	津波の衝撃
11	海水の蒸留器機	DSN SEJAHTERA	いくつか海水の混じる井戸があり	津波の衝撃
12	植栽, 緑	ガンボン全体	土地に水没したものがあり, 環境が快適でない	津波の衝撃
13	小学校, 幼稚園, 保健所	DSN DAMAI	建物が流され, サービスは最低限である	津波の衝撃
14	土地の盛り土	ガンボン全体	地面の沈下と路面より低い土地	津波の衝撃
15	避難建物の建設	DSN DAMAI, DSN MAKMUR, DSN SEJAHTERA	人命を救うための建物がない	以前は考えられていなかった
16	ガンボンの環境整備	ガンボン全体	まだ協力していない住民の協力が必要	津波の衝撃

表7 復興プライオリティの点数表その1

no	居住地の問題の現状／必要	実行力の高さ				利用の程度				緊急性の高さ				貢献度／関心の高さ				総 得点	優先 順位
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4		
B 住宅とその周辺の施設の側面																			
1	土地所有の証明書		2					4		2					3		11	17	
2	水浴び, 洗濯, 便所棟の建設			3				3				3			3		12	12	
3	井戸の掘削		2				2			2				2		8	27		
4	家事用の主要な道具			3				3				3			3		12	13	
5	住宅				4			4				4			4		16	1	
C 教育・健康と社会的な側面																			
1	孤児・老人・ハンディキャップへの援助			3			2			2				3		10	20		
2	無料の投薬		2					3				3			3		11	18	
3	低所得層の中途退学児童への無料教育		2				2			1				2		7	29		
D 経済と住民の能力開発の側面																			
1	資本と商売道具の提供			3				4				4			4		15	4	
2	住民活力の向上のための教育と訓練			3				3				3			3		12	14	
3	破壊された養魚地の修復		2					3		2			2			9	24		

表8 復興プライオリティの点数表その2

no	居住地の問題の現状／必要	実行力の高さ				利用の程度				緊急性の高さ				貢献度／関心の高さ				総 得点	優先 順位
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4		
A インフラストラクチャーと共同施設の側面																			
1	歩道（路地）		2				3			2				2			9	22	
2	海水の堤防			3				4			4				4		15	3	
3	ガンボンの共用器具と家具		2			1				1				2			6	33	
4	礼拝施設				4			3			3				4		14	6	
5	避難用通過道路			3				4			3			2			12	9	
6	排水路（側溝）			3				3			3			2			11	16	
7	応急ゴミ捨て場				4	1				1			1				7	32	
8	上水（井戸、配管、水溜）			3				4			4			3			14	7	
9	バレボールコート			3		1				1				2			7	31	
10	水門			3			2				2				3		10	21	
11	海水の蒸留器機		2					4			3			3			12	10	
12	植栽、緑			3				3	1					2			9	23	
13	小学校、幼稚園、保健所		2					3	1					2			8	26	
14	土地の盛り土		2					4			4				4		14	5	
15	避難建物の建設	1						3	1					2			7	30	
16	ガンボンの環境整備				4			4			4			3			15	2	
17	電気		2					4			3			3			12	8	
18	多目的建物の再建		2				2			1				2			7	28	
19	ガンボンの倉庫建設			3				3				4		2			12	11	
20	魚の競り市場の再建		2					3	1					3			9	25	
21	排水用の用水路の再建・整備		2					4			3			2			11	19	
22	ガンボンの道路再建			3				3			2				3		11	15	

表9 復興対策の費用の獲得先

活動予定	活動規模の見積	活動の影響	受益数	費用の獲得先			
				住民 寄付	地方 政府	中央 政府	NGO 他
住宅	200戸	シェルターとして	>200世帯	—	—	—	○
よりよい組織化	全体	安全面	>150世帯	○	—	—	○
堤防	1000m	地面水没しない	全体	○	○	—	○
資本と道具の提供	138人	住民の経済力向上	>138世帯	—	—	—	○
土地の盛り土	500㎡	適正な開発	>100世帯	—	○	—	○
礼拝所	12×23m	避難建物として	>400人	○	○	—	○
上水	2カ所	適正な飲料水	>138世帯	—	○	—	○
電気	200世帯用	生き生きした生活	>200世帯	○	○	—	○
通過道路（避難道路）	>500m	安全のインフラ	>300世帯	○	○	○	○
塩水の濾過装置	2カ所	飲料水に適正	同上	—	—	—	○
倉庫の建設	7×5m	ものの収容	同上	—	—	—	○
家庭用水浴び、洗濯、便所棟の建設	60棟	生活が健康で清潔に	>80世帯	○	—	○	○
世帯用の器具、道具	200セット	支出を節約	200世帯	—	—	—	○
住民活力向上の訓練と教育	138人	生活技術の増加	>138世帯	—	—	—	○

い点数に来ているのが、これが僕は少し感動したんですけれども、「ガンボンの環境をもう少しよくしたい、自分たちの住んでいるところの環境をよくしたい」という項目です。皆さんが非常にたくさんの点数をつけているわけです。

次は、先のリストアップ表+点数表を優先順位の高い順に並べ直したものです（表9）。それらの資金をどこから手に入れるかが表の右に検討されています。自分たちでお金を出し合うのか、それとも地方政府から出してもらうのか、あるいは、これは多分世界銀行が関係していると思いますけれども、ジャカルタの中央政府がこれまで行ってきたP2KPと呼ばれる都市部の貧困層のレベルアッププログラムのようなところからお金を出してもらうのか、などが検討されています。最後の項目はNGOに表の要求のうち何を頼むかというチェック欄です。先ほどの山本博之先生のプレゼンテーションを聞かせていただきまして分かったのですが、NGOの人がその現場に来ていつも「何が欲しいの」と住民に聞いてくれていた状況があったので、住民側は何でももらえるみたいな期待が多分あったんだろうと思います。だからチェック欄には、実は全部NGOに頼むように全て希望がつけられています。それだけNGOに対して、住民の人たちは期待していたのだらうなということがわかると思います。

表10は、一番住宅復興が進んでいる場所であるデア・グルンパンで、どのようなNGOが関わっているかを示したものです。

先ほどの牧先生の説明とも少し重なりますが、住民データを集めて、それから改善要望を出して、そのプライオリティを決めて、その次に、そこでだれがどの土地を持つ権利があるのか確認するという作業は、大体問題なく決められたということでした。その場所に住んでいた本人が生き残っていない場合でも、何らかの法的な相続の権利のある人が、ある程度見つかっているようでした。土地の持ち主がはっきりしますと、先ほど、牧先生に写真を見せていただきましたが、住民のうちの代表者が責任を持って杭打ちをして区画を決めるということをしています。

その後、区画整理ですけれども、日本みたいに換地まですることはありませんでしたが、道路の拡張を行ったり、すべての住戸が前面道路に面するようにしたりしていました。それから、前から波に襲われたので、精神的には後ろに向かって逃げられないと怖いという恐怖感や圧迫感があるんだろうと思います。「エスケープロード」というふうに英語で呼んでいましたけれども、ガンボンから陸側へ向かって延びる新しい避難用の道をつくる計画を立てています。

表10 デア・グルンパンのドナー一覧

No	組織名	援助の種類	規模	実行状況		
				実行済	実行中	実行予定
1	Plan	上水タンク		○		
2	World Vision	9種の食料, 必需品		○	○	
		バラック 恒久住宅				○
3	Oxfam	セミパーマメント住宅	50戸		○	○
		水浴び, 洗濯, 便所棟		○	○	
		測量器具		○		
		重機			○	
		盛り土の材料		○	○	
		上水 (水配給+タンク)		○		
4	サウジアラビア	資本金, 植栽, 避難テント		○		
		台所用品		○		
5	トルコ	衣服		○		
		健康		○		
6	YBI Yayasan Berkati Indonesia	礼拝所	1棟	○		
		食品, お祈りマット		○		
7	IRD International Relief and Development, Inc	発電機	1台			
		薬品				
8	PCC People Crisis Center	9種の食料, 必需品				
		シャツ, 上着				
9	UN-HABITAT	資本金, 測量道具, ポンプ				
		炊事道具, 植栽, ホワイトボード				
10	Care	経済的援助				
		マイクロ・クレジット資金			○	
11	WFP	浄水器機			○	
		居住地の整備			○	
12	CWS	住宅				○
		-				
13	YIDP	-				
		-				
14	FBA	-				
		-				
15	P2KP Urban Poverty Alleviation Project	住民組織の準備				
		居住地計画とプログラム				
16	PU(公共事業省)	住民主導の居住地整備資金				
		上水道の整備				
17	PLN(国営電力会社)	発電機				
		発電機				
18	Peace Winds Japan	マットレス, シャツ, お祈りマット				
		腰巻き, ガスレンジ, 水浴び器具				
19	Gema 9	ビスケット, ミネラルウォーター				
		ビスケット, ミネラルウォーター				
20	Satkorlak	テント, 米, 小麦粉, 粉ミルク, 砂糖				
		テント, 米, 小麦粉, 粉ミルク, 砂糖				
21	クウェート	ボート	4隻	○		

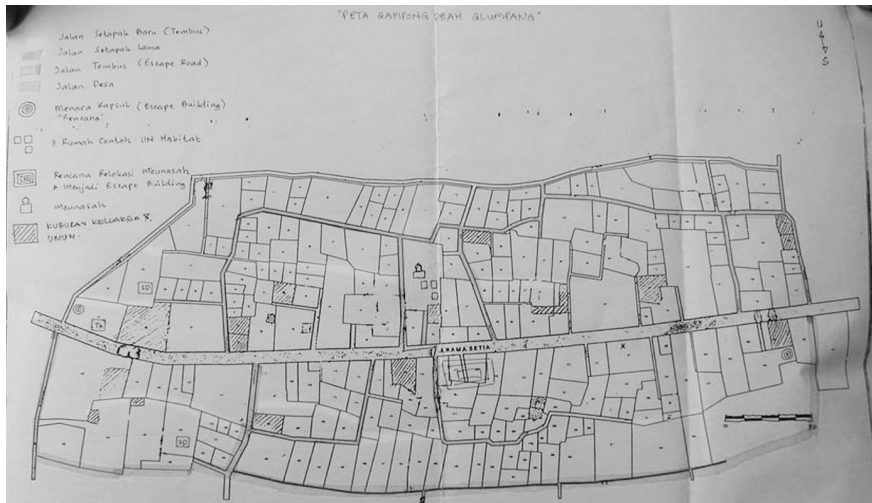


図6 デア・グンプアの居住地復興計画

この図6が最終的に居住地全体の計画図になります。図面の下方、横に走るのが避難道路です。この村の場合は後ろに村がもう一つありますけれども、そこへ道をつなげるものです。

この村の秘書の人がすごく頑張っているので、クントロ長官に「あなたが後ろの村も指導しなさい」というふうに言われて、本人は、すごくやる気になって頑張っているという状況です。

それから、災害関係でいいますと、エスケープビルディングと呼ばれる津波が来たときの避難所の計画もあったようです。これは普段はモスクやお祈りの場所を兼ねています。計画図の同心円上の丸印は、ムナラと呼ばれるモスクの塔です。そういったものも一応計画はしているんですけども、さっきのプライオリティリストで順番をつけたとき30番ぐらいになってしまったので、これは作られることは無いだろうと説明していました。

土地の問題がはっきりできると、恒久住宅の援助が次に進むわけです。写真6は、UN-HABITATの若いスタッフが2日に1回ぐらい現場に通っているところです。実際の大工仕事をしていたのは、先ほどの山本博之先生のお話とか、西先生のお話にもありましたけれども、やはりバンダアチェ市の外から来ている人が多いようです。そこでHABITATのスタッフは、被



写真6

災して心が沈んで働く意欲が起こらないかもしれないけれども、なるべく元気を出して自分たちで工事もしたりしたら、賃金も住民たちに回るから働いてみないかと説得しているところです。

2005年夏の時点では50棟の住宅が建ちかけたところだったのですがけれども、順調にいったら、年度末で、200棟ぐらいの住宅がひょっとしたらできていられるかもしれません。

住宅が供給される時、だれが先に住宅をもらうかというのも、このガンボンを含めてほかのところでも大体決めているところが多いようです。この例では、1番が子持ちの未亡人、2番が親を亡くした孤児、3番が低所得層、4番が高齢者、5番がハンディキャップト、といった順番です。場所によって同じような優先順位を決めているところもありますし、また違った基準のところもあります。

図7では、バンダアチェ市で、津波の被害を受けた地域が色分けされています。

海岸沿い(左上)が高波に直接飲み込まれたために、ほとんど建物とかが壊れてしまったところです。その内側の濃い色が洪水被害でおさまったところで、さらに内側の淡い色が被害を受けなかったところです。図8は調査地域を示したもので、大体同じスケールであわせているんですが、この辺の薄いハッチをかけて示した地域を回りました。

その中で行政区画ごとにいろいろ話を聞いて、先ほどの被害状況を示した図と比較しながら状況を見ておりました。

次に全体での宅地境界の確認と区画整理の状況についてお話しします。いろいろ住民データを確認した上で、実際に事業を動かすと、まず宅地境界を画定して、それから区

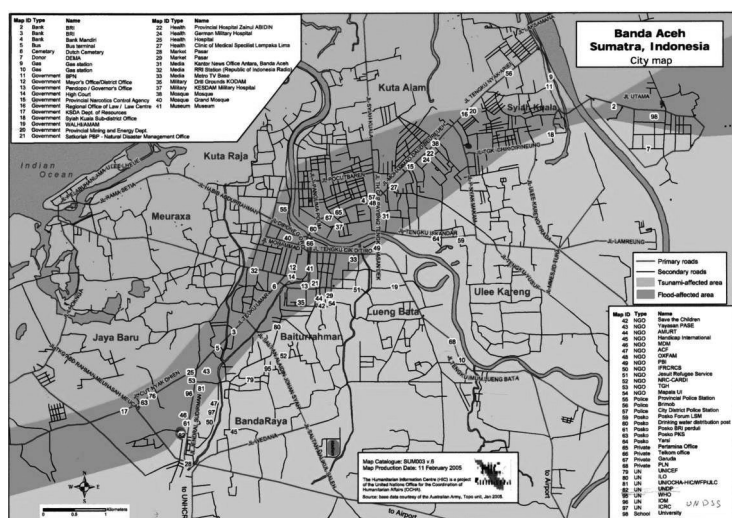


図7 津波による被災地域

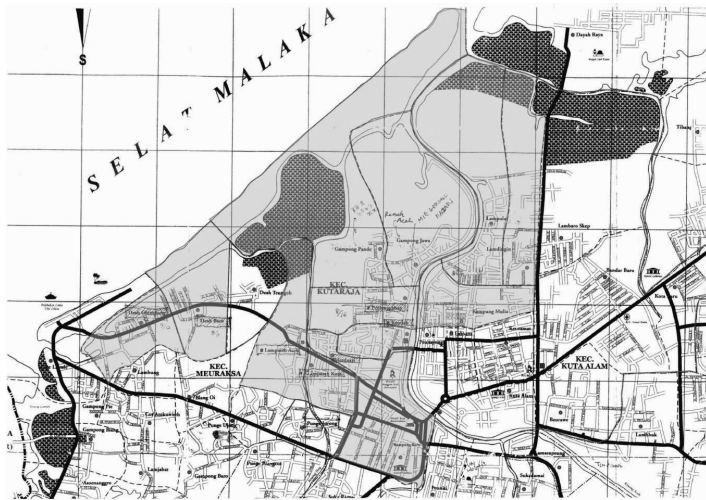


図8 聞き取り調査を行った地域

画整理をやるならやって、その後、住宅を建てていくという順番になります。宅地の境界確認のことを住民は英語でそのまま「ランドマッピング」と言っていましたけれども、これについては、ほとんど2005年の5月ぐらいにみんな済ませていました。土地はそれぞれ持ち主がちゃんと確定して、一安心という状況でした(表11)。

それから、区画整理で道を広げたり、新たに道をつくったりとかしている例というのは実は少なく、見て回った全部で10ヶ所余りの行政区画の中で先ほどの村ともう一

表11 宅地境界確認と区画整理の実施状況

ガンボン名	土地区画境界の確認			区画整理		
	実施状況/期間	測量実施者	援助/技術指導団体	実施状況	新規計画物	援助団体
Meuraksa区					避難道路	
1. Deah Glumpang	完了/Jun 2005	住民	YIDP**	計画中	避難建物	UN-HABITAT
2. Deah Baro	完了/Mar 2005	住民	YIDP**	計画なし		
3. Deah Teungoh	完了/Apr 2005	住民	BPN**	計画なし		
4. Lampaseh Aceh	完了/Aug 2005	住民	UN-HABITAT+WV*	計画中		UN-HABITAT
5. Lampaseh Kota	未計画			計画なし		
6. Punge Jurong	完了/Jul 2005	住民	UN-HABITAT	計画中		UN-HABITAT
Kuta Raja区						
7. Gampong Pande	完了/Jun 2005	住民	UNSYIAH+YIPD**	計画中		アジア開発銀行
8. Gampong Jawa	完了/May 2005	住民	YIPD**	計画中	避難建物	
9. Peulanggahan	予定	住民	Peduli Aceh*	計画なし		
10. Keudah	完了/不明	住民	UNSYIAH+YIPD**+BPN**			
Baiturrahman区						
11. Merduati	完了/May 2005	住民	UNSYIAH+UN-HABITAT	計画中	避難建物	UN-HABITAT
Kuta Alam区						
12. Lampulo	完了/May 2005	住民	None	計画なし		
13. Lamingin	部分的に完了	住民	BPN**	計画中	避難道路	アジア開発銀行
14. Kampung Mulia	部分的に完了	住民		計画なし		

* NGO, ** 政府機関

つだけでした。

3 状況供給状況のまとめと課題

現場で実際に住宅の供給状況を見ていて、大きく気付いたことが一つありました。基本的には、NGOは早く結果を出したいので、住民が上手く機能している場所に援助をしたいということがあります。そしてあるNGOがどこどこに住宅を何棟建てたいという希望を調整するのが、ひとつには、UN-HABITATの役目としてあります。いくつかの現場で話を聞いているうちに、UN-HABITATが入っていないところは、どうもアジア開発銀行がコーディネーターとして入ってやっているところがあるようでした。そして、アジア開発銀行が入っているところは、NGOは早く住宅をつくりたいと言っているんですけども、住民とのコーディネートが上手くできていない印象で、住宅供給についてはちょっとスピードが遅いかんじでした。恐らくアジア開発銀行ですと、世界銀行のスキームでも同じだと思いますが、インドネシアの場合、政府機関を通じてそういった援助を受けるというルートが決まっているので、その路線で仕事を動かしていると思うと、やはりそれなりに時間がかかるんだろうと思います。恐らくそのせいで対応が遅くなって、アジア開発銀行がコーディネーションしているところは、NGOなどドナーがいても、実際に去年の8月現在の状況で住宅が建設されているのはほとんどなかったという状況です。その一方で、UN-HABITATは非常に現場主義でした。スタッフが住民達を訪ねて現場で次々に意思決定していくという形でした。それが結果的に目指す居住地の物理的環境の質としてどうかという問題はあるかとは思いますが、迅速に人々の住宅が欲しいというニーズに対応するという点に関しては、やはりそれなりの結果を出していると言えると思います（表12）。

この辺で、まとめさせていただきたいと思います（図9）。沿岸部北方とその東側内陸の淡いハッチがかかっている二つがアジア開発銀行のパイロットプロジェクトとして2005年の夏ぐらいの時点手をつけ始めていたところです。その南側と南西側のハッチがかかっているところが4地区ありますが、これがUN-HABITATがコーディネーションに入っているところでした。アジア開発銀行のパイロットプロジェクトの位置は市街中心から外れた海際に位置します。

UN-HABITATが入っている地区のうち2つは、少し郊外の海際に近い場所で、このうちのひとつが本日、中心的な例として紹介したものです。もう2つは街中の位置にあって、郊外の場合とは、同じUN-HABITATが入り込んでいる中でも少し状況が違いました。

最後のまとめになります。まず、1番目は先ほどもお話ししたように、コーディネーターの違いによって、復興速度、住宅建設に違いが出ていることです。アジア開発

表12 住宅供給状況とコーディネーター

ガンボン名	居住者の 恒久住宅 要求戸数	コーディネーター	ドナー	提示された 恒久住宅 戸数	工事中の 恒久住宅 戸数
Meuraksa 区					
1. Deah Glumpang	400	UN-HABITAT	Oxfam* World Vision* UN-HABITAT	76 52 200	50 0 0
2. Deah Baro	160	UN-HABITAT	Oxfam* YBI*	60 50	20 10
3. Deah Teungoh	350		Oxfam* YBI*	81 120	50 20
4. Lampaseh Aceh	407	UN-HABITAT	UN-HABITAT, World Vision*	提示なし	—
5. Lampaseh Kota	要求未定	—	—	—	—
6. Punge Jurong	919	UN-HABITAT	UN-HABITAT, World Vision*	提示なし	—
Kuta Raja 区					
7. Gampong Pande	145	アジア開発銀行	Muslim Aid*	提示なし	—
8. Gampong Jawa	557		Muslim Aid*	150	1
9. Peulanggahan	600	UN-HABITAT	UN-HABITAT	500	0
10. Keudah	469	UN-HABITAT	UN-HABITAT, World Vision*, GTZ*	提示なし	—
Baiturrahman 区					
11. Merduati	要求未定	—	—	—	—
Kuta Alam 区					
12. Lampulo	300		コントラクター (アラビア系) コントラクター (ドイツ系)	提示なし	—
13. Lamdingin	636	アジア開発銀行	アジア開発銀行 GTZ* PKPU(PKS)*	提示なし 30 50	0 0
14. Kampung Mulia	700		HABITAT for Humanity*	提示なし	—

*NGO

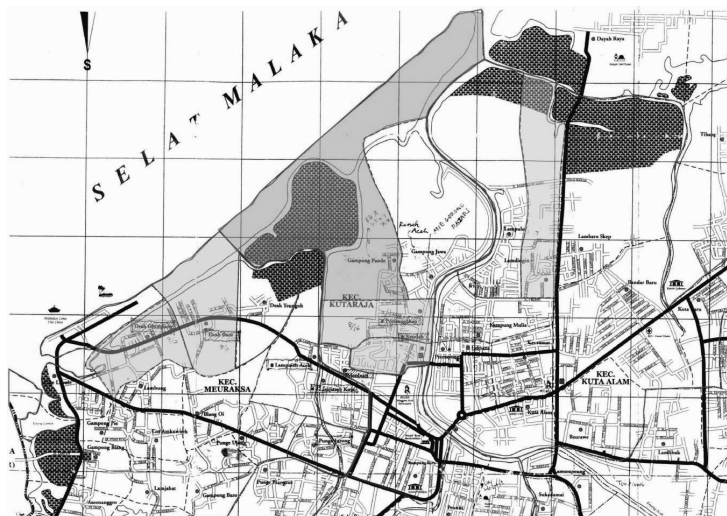


図9 UN-HABITATとアジア開発銀行の担当地域

銀行が関わっている場合は、実は3日ぐらい前にスラバヤ工科大のスタッフから計画を受け取りまして、きょうは持ってこられなかったのですが、かなり念入りに地区計画のような絵をかいていました。きちんと計画図を検討してみないと、時間がかかっているのがいいことなのか悪いことなのかは言えないところはあるんですけども、スピードの違いが出ているのは確かです。

それから、2番目は、同じUN-HABITATがかかわっている場所でも、市街中心部と郊外部で住宅要求が違うということです。市街中心部では、かなりの住宅が壊れてはいるんですが、残っている家を見てみると、住宅の規模も大きいですし、中心の繁華街に近いということもあって、道路沿いに建ち並ぶのは、1階がお店で、2階以上に居室がある、いわゆるショップハウスと呼ばれるものです。つまり、市街中心では、商売をやるような人たちが住んでいて、恐らく少し生活レベルが高いんだろうと思います。そういった人たちは、ドナーからもらえる36平米の住宅、つまり4畳半よりちょっとスペース4分くらいの面積ですけども、そういった住宅は要らないと言い始めています。私が参加したMonday Meetingでも、あるNGOの発表者が、その傾向は全体のものだと、言っていました。それで、市街中心部では、UN-HABITATが一生懸命コーディネーションしても恒久住宅建設が進んでいないという状況があります。

もう一つ郊外と少し状況が違うのは、市街中心部はインドネシアの街はどこでもそうだと思いますけれども、借家人（店子）がいっぱいいることです。UN-HABITATは、きちんと借家人のことも考えて、住民に対して対応していました。具体的に言うと所有権は大家さんに預ける形で供給して、ただし、大家さんは、借家人が居たから火事太りというのは筋が違うので、ただでそれを店子のためにもらうというのはおかしすぎるので、貸家人が自立できる時間を2年か3年とって、その後は、供給された住宅は礼拝場や集会場など、公共の目的に使いなさいというものでした。

簡単な現状報告ですが、以上で発表を終わらせていただきたいと思います。

質疑応答

司会：どうもありがとうございました。

時間が押しておりますが、ただ今のお二人のご報告についてご質問を受けたいと思います。

田中 聡：はっきりわからなかったのですけれども、土地利用の制限とかは結局、何もやらなかったのですか。

山本直彦：最初は海岸から200メートルは住宅をつくらせないとかありましたよね。それは、間もなく無くなっているみたいです。

田中 聡：一切なしですか。

山本直彦：はい。

田中 聡：そういうのは、国連のほうでは、UN-HABITATでも何でもいいんですけども、特に指導もせずに、あるいは、ぐじゃぐじゃやっている間になくなっちゃったんですか。

山本直彦：公共事業省の地方オフィスに話を聞いたんですけれども、役所側は、仕事をコンサルに丸投げしているようでした。復興計画については、公共事業省の管轄下では表通りの景観の整備みたいなことは中期計画としてやっていたんですけれども、例えば、用途地区みたいなのを敷いたり、同時に高さを区切ったりとかということは、やっておりませんでした。JICAどうなんですか。

牧 紀男：とりあえずなくなったのはなくなった。200メートルセットバックは、いつなくなったんですか。

永井博記：住民が移る場所を要求したのに政府がこたえなかったので、NGOと住民が直接話をしたのです。

山本直彦：ですから、行政はかなり蚊帳の外という雰囲気はありましたね、いろんなところで。

司会：そのバッファゾーンがなくなったということに対して、きょうの最初の渋谷さんのご報告の中にも出てきました「グリーンベルト」の植林といったプロジェクトは動いていないのでしょうか。

山本直彦：その辺、情報は全く持ち合わせていなくて、お答えできなくて申しわけありません。

池田恵子：静岡大学の池田です。簡単な確認ですけれども、住宅の復興委員会をつくって、そこで住民たちが優先順位や問題をリストアップして復興を進めていくというやり方は、UN-HABITATかどこかが提案して、すべての街の地域において適用されている方式なんのでしょうか。それとも、ある特定の地域だけでなされていることなんのでしょうか。

それと、この委員会のメンバーは有志だそうですけれども、住民の有志というのとはどういう意味ですか。ボランティアとして、「はい」と手を挙げたという意味なのか、それとも、ある程度「こういう役職についている人は入りなさいよ」ということがあったのか。復興委員会のメンバーを決めたのは一体だれなんだということをご説明いただければと思います。

山本直彦：1点目のご質問ですけれども、インドネシアは、広く住民参加をしてインフラ整備をするというやり方はずっとしています。バンダアチェの場合には、UN-HABITATも「コミュニティ・ベスト・ハウジング」ということを一応うたっています。お話を聞いたときには、インドネシア政府の住民参加のやり方を取り入れた上で、それとマッチしたやり方でやるということをしていました。

この住民参加のやり方は、「アーバン・デベロップメント・プログラム」とUN-HABITATの主任スタッフのアフガニスタンの方は英語で言っていましたけれども、多分インドネシア語だと、P2KPという都市の貧困対策プログラムのことだと思います。そういう組織をちゃんと使っているということです。

2点目のご質問ですけれども、実はここに元ネタのレポートがあるんですけれども、それを見ていると、既存のプログラムで何かの役職を得ている人も入っているのですが、一旦、そういう人たちに立候補させて、選挙をしているようです。それでオーソライズされて、選ばれた有志になっているということがレポートの中には書いてあります。

渡辺正幸：渡辺と申します。牧さんにお伺いしたいのですが、阪神・淡路大震災のケースと比較してアチェの復興速度はまともだとおっしゃいましたよね。それが私にはよくわからないのです。例えば、比較の尺度ですよね、何をとられたか。何を比較の尺度にして阪神・淡路大震災と比べて遜色ないと言われているのか、それを伺わせてください。

牧 紀男：絶対の時間の尺度とそのプロジェクトの動きです。ただ、分野によっては、特に水道が遅れているんですが、阪神・淡路大震災の場合は水道は3カ月で通りましたから、それは遅いんですが、皆は「ものすごく遅い」というけれども、道路は8カ月後には直っているし、テントに住んでいる人びとが「遅い、遅い、なぜ仮設住宅を政府はくれないのか」と言いますが、阪神・淡路大震災の最後の仮設住宅ができたのは8月30日なんですね。ですから、8カ月後です。そのときに仮設住宅の工事をやっているのは、タイムスケールとして非常に遅いわけじゃないということで、そういうふうに申し上げているだけで、完全に分析して正確にそういうふうには申し上げているわけじゃないのです。「ものすごく遅い」と言うので、そうじゃないんだと、公の大きな被害を受けたそれからの復興というのは時間もかかるし、コーディネーションでしっかりしたい街をつくっていくには、先ほどのアジア開発銀行の話とも関係があるんですけ

れども、しっかりとやっていくというのは必要なんだという意味で、そういうふうにし上げていくことと、それから、客観的に見ても、今見たような時間のスケールを入れると、それほど遅れているわけじゃないんだというふうなことで言っているわけでございます。よろしいですか。

渡辺正幸：余りよろしくないです。

牧 紀男：「遅い！」と言いたいんですか。

渡辺正幸：いや、よろしいですよ。

牧 紀男：また後でもいいですけども。

司会：ほかにご質問、ご意見はございませんでしょうか。よろしいですか。

それでは、以上で牧さん、山本直彦さんのご報告を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

